

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：25502

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K11956

研究課題名(和文)合理的配慮を加味し、発達障害の診断を必要としない看護教育支援プログラム

研究課題名(英文) Nursing education support program that does not require diagnosis of developmental disorder considering rational consideration.

研究代表者

吉兼 伸子 (Yoshikane, Nobuko)

山口県立大学・看護栄養学部・准教授

研究者番号：30637137

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：看護教員及び実習指導者を対象に看護学生の実習指導上の教育困難感を3年にわたり質的調査を行った。その結果、135エピソードが示され、「看護過程が展開できない」「実習態度が不適切」「患者との関わりが不適切」に分類された。そのうち、発達障害が強く疑われるエピソードは3つに過ぎなかった。

次に看護教員を対象に对人困難学生による負担感について量的検討をした。その結果、看護教員の93.2%は当該学生の指導経験があり、看護教員の負担感に関連した項目は、臨地実習(.357)、「技術チェック(.269)」「親の情緒不安定(.245)」「自分の精神衛生に影響(.236)」であった。(調整済R.653)

研究成果の学術的意義や社会的意義

人間関係を基盤とする看護学科においても発達障害傾向の学生は存在する。本研究で、実習困難状況のエピソードで発達障害が強く疑われるものは153中3つであった。また、看護教員の負担感に関連した要因に、発達障害傾向の学生の状況は含まれなかった。以上より、通常の実習指導を具体的にして、学生の特性に合わせ、先が見通すことができる内容を盛り込むことで、発達障害傾向の学生も実習に適応しやすくなる。

看護職は、社会的ニーズが高く人間関係が苦手でも就職することができる。看護教員が、発達障害傾向の学生の実習指導時の負担感が減少し、当該学生の適応感が増すことは将来の看護人材確保にも社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：In this study, a questionnaire survey was conducted with teaching staff in nursing to investigate their causes of burdens associated with students who have difficulties building a relationship with others (hereinafter referred to as students with relationship difficulties).

The results of the survey indicated that 93.2% of participating nursing teaching staff experienced teaching students with relationship difficulties. Additionally, 96% of such students were not diagnosed with any disorders. A multiple linear regression analysis was performed by defining perceived burdens by nursing teaching staff as dependent variables and the above-mentioned causes as independent variables. The adjusted results (an R2 of 0.653) of the analysis were as follows: on-site practicum (.357), technical tests (.269), and emotional instability in students' parents (.245).

研究分野：基礎看護学

キーワード：発達障害傾向 看護学生 看護学実習

1. 研究開始当初の背景

現在の大学教育現場では支援を要する学生が増えている。独立行政法人日本学生支援機構が実施している「大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査」によると、障害のある学生の在籍者数は、平成 23 年は 10,236 人となっており、5 年前の平成 18 年の 4,937 人と比較すると倍増している。

しかし、文科省が示す合理的配慮の範囲が不明確であり、現場の教員に負担が生じている。文科省の「障がいのある学生の修学支援に関する検討会」の報告書によると、「教育上の合理的配慮」の活動範囲は、「授業、課外授業、学校行事への参加等、教育へ関するすべての事項」を対象としており、教育とは直接に関与しない学生の活動や生活面への配慮まで含んでいる。加えて、看護教育における対象学生の実態は分かっていない。

看護職の養成を目的とする看護学科においても、池松 (2011) によると対象学生は存在する。しかし、その実態は分かっていない。また、患者とコミュニケーションが円滑にとれない学生の看護学実習指導に苦慮する現状も遠藤 (2014) は報告しているが、社会福祉系・作業療法系に比して、支援プログラムの報告例は少ない。

2. 研究の目的

本研究では①看護学科における発達障害の行動特性のある学生を教育することでの困難状況の実態と内容の把握（教員の負担感も含む） ②看護教育の困難状況や指導時の対処法とその課題 ③上記 2 点を踏まえた支援マニュアルの作成を目的とする。

3. 研究の方法

(1) 調査 1

平成 27 年から 29 年の 3 年間、Y 県内看護協会主催の実習指導者講習会の実習指導者各 45 名を対象に、自由記述を中心とした質問紙調査を実施した。質問項目は「あなたが実習指導時に困難を感じたり、戸惑ったことはどのようなことでしたか」であった。自由記述の内容は、質的帰納的に分析し、内容の類似性により分類しつつ、要約していくコーディング作業を行いカテゴリ化した。その後、テキストマイニングソフトである「トレンドサーチ 2015」を用いて、重要語彙を抽出し要因マップ（コンセプトマップ）を作成する。質的な要因分析のカテゴリとコンセプトマップを照合することで、妥当性を検証した。

本研究の実習指導の困難感、学生の指導困難が中心であるため、実習指導者自身の指導力や患者設定の困難感に割愛した。

(2) 調査 2

2019 年 A 県 8 看護師養成施設の看護教員を対象に無記名自記式質問紙を直接配布し留め置き法で回収した (n=88)。

調査項目：①対人困難学生の有無、②対人困難学生の障害診断 (ADHD, ASD, LD) の有無、③対人困難学生に起因する教員の負担感の程度、④対人困難学生の困る場は、講義や臨地実習など 7 つの場⑤対人困難学生の状況と程度は、先行研究 (吉兼, 2018) から 50 の状況を選択、⑥関わる教員の悩みはグループ分けや就職など 11 項目、⑦対人困難学生への対応行動は、個別対応や教員間の情報共有など 23 項目を選択した。また、保護者対応は免許取得にこだわるなど 8 項目で回答を求めた。③～⑧は、大変 (5 点) ～全く (1 点) までの 5 件法で調査した。そのため、点数が高いほど困り感や悩みが大きいことを示す。研究の枠組みを図 1 に示す。

分析：(1) 記述統計 (2) 教員の負担感に有意な要因の特定のため、教員の負担感を従属変数に、各項目を独立変数に一元配置分散分析を行った。

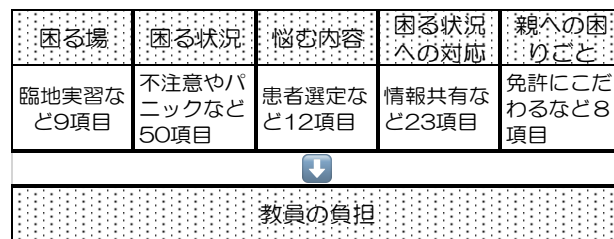


図 1 本研究の枠組み

(3) 教員の負担感に関連する要因の順序性を特定するために、教員の負担感を従属変数に (2) において有意差を認めた項目を独立変数に、重回帰分析を実施した (ステップワイズ法)。いずれも有意水準は 5% 未満とした。

4. 研究成果

(1) 調査 1 の結果

H27～29 年まで各 45 名の指導者から、135 のコードが示され、表 1 のように分類した自由記述に発達障害の可能性が強く示される行動特性は、<認知症の患者がお茶を飲しがるときに与え、昼食後に 10 の飲水をしたために、大量に嘔吐し一時的にショック状態に陥った><患者との距離が近すぎて、拒否された><教員に対して乱暴な言動>であった。発達障害の可能性が否定できない行動特性では、<カルテを手洗い場で開いた><前日にケアの内容を指導しても、計画に反映されない><根拠がなく、患者さんは病状が悪いです。退院は無理だと思えますと

いう><聞かなければいけないことを手帳に書き脈絡なく聞く>等示された。

テキストマイニングソフトで作成した要因マップにおいても、「看護過程の思考」「実習態度」「患者との関わり」がそれぞれ塊として示された。

以上より、今回、実習指導者が困難を感じたカテゴリは、経年でみても「看護過程の指導」と「実習態度」と「患者との関係性」と「行動特性」と「行動特性」であった。先行研究と類似する内容であったことは、看護学実習の困難感の中心的な内容だと捉えられた。

しかし、対象学生の行動特性に発達障害の可能性が強く示唆される具体的なエピソードは135件中3件<患者との距離が近すぎる><患者が希望するたびに飲水をさせた><教員に乱暴な言動>だけであった。また、発達障害の可能性も否定できない行動特性は各カテゴリに万遍なく認められた。

看護学実習は、実習毎に目標、受け持ち患者・実習指導者・実習教員も異なるため、常に学生は新たな体験や学習を強いられる。実習指導者が感じる困難感、新たな実習に戸惑う学生の状況と、対象学生の行動特性は酷似し表面化しにくいと推察された。このことは、両者共に通常の指導をもっと具体的にタイムリーに行うだけで、困難をのりこえられる可能性を示唆すると同時に、発達障害の可能性を強く示唆された行動特性を示す場合は、担当する指導者および教員で合理的配慮を検討する必要性が示された。

(2) 調査2の結果

属性：男性9名、女性79名であった。平均年齢47.6歳 (SD9.64)

経験年数9.4年 (SD8.22)、職位は学校長(2)、教頭(4)、教務主任(10)、専任教員(59)、講師(3)、助教(3)、助手(2)他であった。

①対人困難学生の有無 88名中、82名は対人困難学生の教育を経験していた(93.2%)。対人困難学生の性別は、男性35名(42%)、女性47名(58%)であった。

②対人困難学生の障害診断の有無 障害診断のある学生は、3名(3.6%)で、診断はLD(1)、ASD(2)であった。

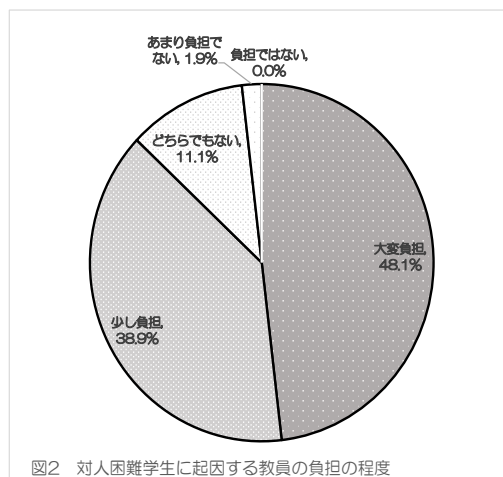
③対人困難学生に起因する教員の負担感の程度 大変負担41.5%少し負担41.5%、どちらでもない12.2%あまり負担でない3.7%、負担ではない1.2%であった(図2)。

④~⑧ 教員の負担感の程度で有意差を示した項目

表2に教員の負担の程度で有意差を示した項目の結果の一覧を示す。項目は「大変～」と「少

表1 実習指導者の実習指導困難感の内容と経年変化

カテゴリ	サブカテゴリ	内容例	H29	H28	H27	計
看護過程に指導に困難感がある	情報収集の偏り	情報収集をパソコンからする。聞かなければいけないことを手帳に書いて一つずつ、脈絡もなく聞く	9	8	10	27
	アセスメントに根拠性がない	アセスメントに根拠がない。アセスメントができない。自己判断と思込みがある。	3	3	3	9
	看護計画立案や課題ができない	課題をやってこないが、毎日来る看護計画をまったく考えず、実習に来る	2	3	4	9
	指導が理解できない	前日の指導が反映されない。文章の意味が不明。注意すると不機嫌になる。指導を理解するのに時間がかかる。	7	5	2	14
	計		21	19	19	59
患者との関わりが不適切	言葉遣いが適切でない	患者にも指導者にも敬語を使わない患者に友達感覚で話す	3	5	3	11
	患者との距離感	患者との距離が近すぎて拒否されたベッドサイドに黙ったまま立ち尽くす	4	5	7	16
	患者の状況や配慮のなさ	ケア計画を患者主体で考えてない食事を下げずに検温をする	4	4	7	15
	計		11	14	17	42
実習態度が不適切	態度が不適切	言動が乱暴。実習中に患者のテレビを見ており、注意すると不機嫌になった	2	2	3	7
	場違い・勘違いな行動	カルテを手洗い場で書く。積極性と思い看護者に聞かず医師やコメディカルに質問をする	3	4	3	10
	計		5	6	6	17
学生の行動傾向	反応が薄い	反応が薄い。質問すると黙る。自分の意見を言わない	5	4	4	13
	話し合いが出来ない	個性が強すぎて話し合いにならない。学生間では意見が言えるが、指導者にはいえない	1	1	1	3
	実習に来ない	突然実習に来なくなった	1	0	0	1
	計		7	5	5	17



し～」の割合を加えて降順に表示した。重回帰分析で教員の負担感に関連する要因としてあげられたのは4項目（表2の網掛け）、臨地実習（ β .357）「技術チェック（ β 269）」「親の情緒不安定（ β .245）」「自分の精神衛生に影響（ β .236）」であった（調整済みR².653）。

以上より、山下（2016）同様に本調査でも看護教員の93.2%は、対人困難学生の教育を経験していた。そのほとんど（96%）は障害診断はない。対人困難学生に起因する負担感を感じている教員は、8割を超え、対人困難学生への対応で有意差を示したものはない。これは、教員が常に実施し、対応を試行錯誤していることを示す。

重回帰分析において教員の負担感に関連した項目は「臨地実習」「技術チェック」であり、臨地や学内での実践的な教育が負担になっていた。次に、保護者対応の「親の情緒不安定」が上がり、教員が保護者と対人困難学生の教育についての話し合うことの難しさを示している。それらは、「教員自身の精神衛生」にも影響を与えていた（図3）。

教員の負担感に関連した項目をみると、対人困難学生の状況や対応ではなく、学習場面や保護者対応など関係調整の方が教員にとっては負担となっていた。加えて、重回帰分析において、いずれの項目も重回帰係数に陰性項目がないことは、未だに有効な対応策がないことを示し看護学生への合理的配慮の難しさが示唆された。

表2 各質問で教員の負担感の程度での有意差項目 $p < 0.05$ 斜字は重回帰分析の有意差項目

困る場	大変困る	ちょっと困る	どちらでもない	あまり困らない	まったく困らない	困る以上	平均	標準偏差
6 臨地実習	59.0%	37.3%	2.4%	1.2%	0.0%	96.4%	4.5	0.32
3 技術演習	24.1%	53.7%	11.1%	11.1%	0.0%	77.8%	3.8	0.92
2 グループワーク	24.7%	50.6%	13.0%	11.7%	0.0%	75.3%	3.8	0.74
4 技術チェック	25.0%	44.7%	21.1%	6.6%	2.6%	69.7%	3.8	0.97
7 施設見学実習	4.1%	40.5%	37.8%	6.8%	10.8%	44.6%	3.2	1.02
9 臨地との行事	2.7%	40.0%	34.7%	13.3%	9.3%	42.7%	3.1	1.00
5 実習カインテュウ	6.6%	31.6%	44.7%	10.5%	6.6%	38.2%	3.2	0.96
8 行事	1.3%	18.7%	34.7%	30.7%	14.7%	20.0%	2.6	1.00
困る状況	大変困る	ちょっと困る	どちらでもない	あまり困らない	まったく困らない	困る以上	平均	標準偏差
50 提出日に遅れる	36.0%	45.3%	9.3%	4.0%	5.3%	81.3%	4.0	0.95
31 同じ失敗	31.6%	44.3%	17.7%	5.1%	1.3%	75.9%	4.0	0.90
28 場に即した態度	42.3%	32.1%	14.1%	7.7%	3.8%	74.4%	4.0	1.11
4 指示を聞かない	30.4%	40.5%	22.8%	5.1%	1.3%	70.9%	3.8	0.92
6 忘れる	30.0%	40.0%	15.0%	12.5%	2.5%	70.0%	3.8	1.38
22 集合時間に遅れる	40.3%	26.0%	22.1%	6.5%	5.2%	66.2%	3.9	1.12
3 聴いていない	17.9%	46.2%	26.9%	9.0%	0.0%	64.1%	3.7	0.86
47 パニックになる	26.6%	35.4%	27.8%	6.3%	3.8%	62.0%	3.7	0.90
12 一方的にしゃべる	20.8%	40.3%	22.1%	5.2%	11.7%	61.0%	3.5	1.11
42 話が飛ぶ	19.2%	38.5%	29.5%	9.0%	3.8%	57.7%	3.6	0.99
29 ノートがとれない	20.8%	31.2%	26.0%	11.7%	10.4%	51.9%	3.4	1.23
36 月曜日を休み	14.3%	36.4%	24.7%	5.2%	19.5%	50.6%	3.2	1.09
30 聞き漏らし	12.8%	37.2%	30.8%	11.5%	7.7%	50.0%	3.4	1.09
9 最後まで聞けない	10.3%	38.5%	25.6%	9.0%	16.7%	48.7%	3.2	1.33
10 順番を待てない	13.5%	31.1%	21.6%	14.9%	18.9%	44.6%	3.1	1.04
悩む内容	大変悩む	ちょっと悩む	どちらでもない	あまり悩まない	まったく悩まない	少し悩む以上	平均	標準偏差
5 患者選定	38.0%	50.6%	11.4%	0.0%	0.0%	88.6%	4.3	0.68
1 グループ分け	45.6%	40.5%	11.4%	2.5%	0.0%	86.1%	4.3	0.77
2 周りの学生の調和	31.3%	52.5%	13.8%	2.5%	0.0%	83.8%	4.1	0.73
4 実習病院（実習病棟）	41.0%	41.0%	16.7%	1.3%	0.0%	82.1%	4.2	0.77
3 認識の差	25.6%	47.4%	26.9%	0.0%	0.0%	73.1%	4.0	0.72
7 進路変更を勧める	29.5%	34.6%	28.2%	5.1%	2.6%	64.1%	3.8	0.87
8 就職先	34.6%	29.5%	30.8%	3.8%	1.3%	64.1%	3.9	0.95
12 自分の精神衛生に影響	12.8%	37.2%	26.9%	17.9%	5.1%	50.0%	3.3	1.11
9 親御さんの対応	20.5%	24.4%	48.7%	3.8%	2.6%	44.9%	3.9	0.81
10 外部機関相談	20.5%	24.4%	48.7%	3.8%	2.6%	44.9%	3.6	0.91
11 自分の生活に影響	5.2%	27.3%	40.3%	22.1%	5.2%	32.5%	3.1	0.98
親への困りごと	大変困る	ちょっと困る	どちらでもない	あまり困らない	まったく困らない	少し困る以上	平均	標準偏差
4 親が自己中心的である	47.4%	35.5%	15.8%	1.3%	0.0%	82.9%	4.2	0.78
8 免許取得にこだわる	41.9%	39.2%	17.6%	1.4%	0.0%	81.1%	4.2	0.78
3 情緒不安定である	44.6%	35.1%	18.9%	1.4%	0.0%	79.7%	4.2	0.80
5 親と話がでない	33.8%	40.5%	21.6%	4.1%	0.0%	74.3%	4.0	0.85
2 親が神経質である	31.1%	41.9%	24.3%	2.7%	0.0%	73.0%	4.0	0.81
7 叱ることができない	30.7%	33.3%	28.0%	8.0%	0.0%	64.0%	3.8	0.94

困る場	困る状況	悩む内容	困る状況への対応	親への困りごと
臨地実習 技術チェック		自分の精神衛生に影響		情緒不安定
β .357		β .236		β .241
β .269				
教員の負担 R ² .643				

図3 教員の負担感に関連した要因 重回帰分析結果

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 吉兼伸子	4. 巻 22
2. 論文標題 保育・教育職種の業務上負担感の比較 - 学習面・行動面で著しい困難を示す子どもに対する負担感を中心として -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 保育と保健	6. 最初と最後の頁 67-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉兼伸子	4. 巻 13
2. 論文標題 看護師養成施設における看護教員の負担感について -対人関係の構築を苦手とする学生に焦点をあてて-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山口県立大学 看護栄養学部紀要	6. 最初と最後の頁 37-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉兼伸子
2. 発表標題 看護学実習における実習指導者の指導困難感の検討 学生の特性の経年変化をみて
3. 学会等名 発達障害学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉兼伸子
2. 発表標題 看護師養成施設における看護教員の負担感について（対人関係の構築を苦手とする学生に焦点をあてて）
3. 学会等名 発達障害学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉兼伸子
2. 発表標題 看護学実習における実習指導者の指導困難感の検討ーとくに学生の特性を中心として
3. 学会等名 発達障害学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 吉兼伸子
2. 発表標題 保育上困る子どもと親の状況ワースト3とその程度について
3. 学会等名 保育保健学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>成果物として「発達障害傾向にある看護学生に対する実習指導のヒント」のリーフレットを作成し、以下のリンクで公開している。 https://knowledge.lib.yamaguchi-u.ac.jp/ja/search?creator_user=19&data_type=type4</p>

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考